

環境省絶滅危惧種

チョウ目 シジミチョウ科

アサマシジミ *Lycaeides subsolana*

基礎情報

●**形態** 開翅長3.0cmの小型。オスの翅表は黒地で内側は青色、裏面は灰色地に多数の黒斑紋と朱色の帯がある。メスは、翅表が黒褐色で後翅外縁に数個の朱色半月紋、裏面は白地に多数の黒斑紋と朱色の帯がある。

●**分布域** 本州中部では、長野県（浅間山麓、大北地域、中信高原など）のほか、山梨県や群馬県の一部、富山県、石川県などに分布する。小諸市内では、標高1,000m付近のごく一部に僅かに見ることが出来る。

●**生息環境** 沢沿いの斜面や川原、崖地など。

●**生活史** 年1回の発生。6～7月に成虫となり、食草のある発生地内のアカツメクサなどで吸蜜する。食草の茎下部に1個ずつ産卵し、卵のまま越冬、草の生育に合わせて孵化する。幼虫は約1ヶ月葉を食べて成長し蛹となる。食草は、ナンテンハギ、イワオウギなどのマメ科植物。

現在の生育状況

里地里山の管理放棄や人為が及びにくいとされる場所でも治山工事（砂防ダムや護岸改修など）などによって生息地が破壊されるなど影響を受けている。また、採集者の来訪や道路脇の草刈りによる食草の除去による影響も大きな減少原因となっている。

チョウ目 タテハチョウ科

アサギマダラ *Parantica sita*

基礎情報

●**形態** 開翅長 9.0～10.0cmほどの大型。半透明の水色（浅葱色）が美しいチョウであり、翅の外側前翅は黒、後翅は褐色で、半透明水色の斑点がまだら模様のように並ぶことから名づけられた。オスとメスの区別はつけにくいですが、オスは、翅を閉じたときに、尾にあたる部分に濃い褐色斑がある。

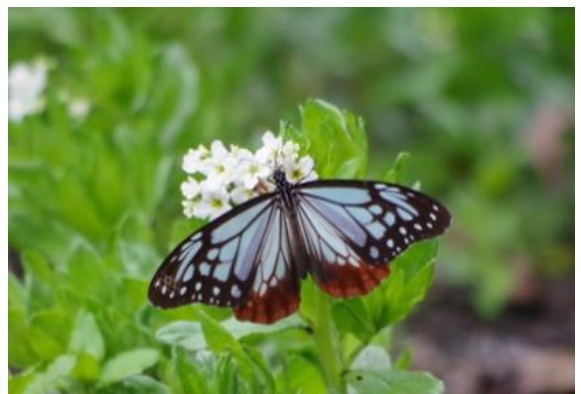
●**分布域** 日本全土に分布し、比較的標高の高い山地に多く生息する。小諸では、9～10月頃、南下する際に立ち寄る姿を見ることが出来る。

●**移動** 春に北上し、秋に次世代が南下する唯一のチョウである。小諸で活動している団体が行ったマーキング調査では、小諸から鹿児島県への1,195kmを移動日数40日で移動した個体や、沖縄県への1,506.5kmを49日で移動した個体などの結果があり、実際に長距離を移動していることが判明している。しかしながら、長距離移動の目的は、全国の移動調査に参加して、移動ルート、移動距離、移動日数などの計測の調査活動を数年行っているが、まだまだ不明なことが多く存在する。

●**生活史** 幼虫は、旧ガガイモ科植物を食草としており、それらの食草は毒性の強い成分を含んでいることから、アサギマダラはこれらを取り組みことで毒化し、身を守っている。成虫は、フジバカマを好み、食草としている。小諸で活動している団体では、フジバカマの栽培に加えてイケマの栽培により、産卵から羽化までの観察もできる取組を行っている。

現在の生育状況

近年では、マーキングの関心度が高まってきていることにより、乱獲や落書きによる（迷子蝶）も増えているため、生態を把握するための調査に影響を及ぼしている。また、夏の猛暑や冬の寒波などの異常気象により個体数が減少してきている。



(写真提供：大島康紀氏)

マツムシソウ目 スイカズラ科

ハヤザキヒョウタンボク *Lonicera praeflorens* var. *japonica*

基礎情報

●**形態** 高さ2mほどの落葉低木。枝はまるく、毛はない。

葉は、対生で小さく、名前の由来のとおり、まだ周りの木々が芽吹く前の、春早い時期（3～4月頃）に枝先に白い花が2つ下向きに並んで咲く。

果実は、径が1cm程度の球形で赤く熟す。

●**分布域** 長野県、山梨県、群馬県、埼玉県、福島県に生育する（山梨県と群馬県に接する長野県側に多いとされている）大変希少な植物であり、氷河期の生き残りともいわれている。

小諸市内では、主に氷地区周辺にバラけて数株ずつまとまって分布している。氷地区以外でも、懐古園付近など限られた場所で見ることが出来る。

●**保護の状況** 長野県では、絶滅危惧種登録はないが、群馬県、埼玉県、東京都、山梨県、福島県、茨城県では、絶滅危惧種Ⅰ類に分類され、絶滅の危険が高い種に指定されている。

生育環境

日本の中でも、乾季の気温が低く、乾燥月の降水量が少なく、夏の最高気温は中程度で、気温の月較差が大きいといった気候条件の場所に偏って分布している。

生存を脅かす要因

森林伐採、シカの食害など。生育環境が岩崖地などの特殊な立地にあるため、山林の改変による生育環境の変化や生育地の破壊が要因であると考えられる。



(写真提供：柴平志保子氏)

ニレ科 ニレ属

オヒョウ *Ulmus laciniata*

基礎情報

●**形態** 高さ20m～25m、直径1m程の落葉高木。樹皮は縦に浅く裂け、色は灰褐色。樹皮は非常に丈夫で、織物や縄の材料になる。

葉は、長さ7～15cm、幅5～7cmの倒広卵形、または長楕円形で2列に互生する。葉の先端が特徴的に3～5裂するか、裂けずに鋭くとがっている。葉の縁には重鋸歯がある。葉の色は濃緑色で短毛がありざらつく。

花は、4月の中旬頃葉の出る前に咲くが、地味で小さいのであまり目立たない。

●**分布域** 北海道、本州、四国、九州に分布しているが、とくに北海道に多く自生している。

小諸市内では、氷地区の風穴周辺に自生している。風穴を離れての自生の確認はない。

●**保護の状況** 長野県では、絶滅危惧種登録はないが、三重県、高知県では絶滅危惧種Ⅰ類に分類され、東京都、大阪府、奈良県、山口県、徳島県、愛媛県では絶滅危惧種Ⅱ類に分類されており、絶滅の危険が高い種に指定されている。

北海道では、オヒョウの樹皮がアイヌ民族のアットゥシという布の原材料になっていることから、苗木を養成し、育成する取り組みを進めている。

生育環境

涼しい地域で生育し、水はけのよい肥沃な場所を好むため、河川中上流部の河畔斜面に多く見られる。

生存を脅かす要因

森林伐採、シカの食害など。



(写真提供：柴平志保子)